

◎ 関西大学・八幡市・URが連携協定を締結

男山団地再生に向け、学生が運営 コミュニティ活動拠点「だんだんテラス」を開設



関西大学と京都府八幡市、同市にある「男山団地」を所有・管理するUR都市機構は10月25日、「男山地域まちづくり連携協定」を締結した。これは、高度経済成長期に発展し、急速に老朽化や住民の高齢化が進む男山団地と周辺地域の活性化を図るもので、行政、大学、事業者が連携して再生を目指す。全国でも珍しい取り組みとして期待が寄せられている。その拠点として、11月16日、男山団地中央センターに「だんだんテラス」を開設した。

▲写真：(左から)山田啓二京都府知事、大西誠 UR都市機構西日本支社社長、楠見晴重学長、堀口文昭八幡市長

石清水八幡宮の南側に広がる男山地域には、1960年代から開発が進められた集合住宅150棟以上が並び、周辺の戸建て住宅等も含めると約2万1000人が暮らしている。しかし、ピーク時よりも約8000人減少しているうえ、市の平均より高齢化も進んでいる。

関西大学は2012年4月よりKSDP団地再編プロジェクトの取り組みとして、男山団地再編と地域の活性化を目指し、学生が団地に滞在して住民ニーズのくみ上げ等を行ってきた。その中の「皆で集える場所が欲しい」という声に応え、11月16日、商店街内の空き店舗を活用して、学生が運営する交流スペース「だんだんテラス」をオープンした。

だんだんテラスとは、“団地の将来を談じる場”という意味が込められており、広さは約45平方メートル。学生と住民が車座になって話し合える板の間等が設けられ、通りからも中が見えやすいよう、透明なガラスの引き戸が用いられている。ここに学生は常駐し、年中無休を目指す。

オープン当日は「だんだんテラス オープニング大作戦」と称した地域交流イベントを開催。市内農家の野菜販売や、団地の今昔が分かる写真の展示、灯るうづくりのワークショップ等が行われ、お年寄りから子供まで、多くの地域住民でにぎわった。



学生がデザインした売り場で、市内農家の野菜を販売した「だんだん市場」



▲(写真・上)「だんだんテラス」に設けられた板の間。学生と住民が車座になって話したり、ワークショップなどが行われる。
▲(写真・下)多くの地域住民が訪れたオープン当日

● KSDP団地再編プロジェクト (関西大学先端科学技術推進機構地域再生センター「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究」プロジェクト) 概要

文部科学省平成23年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された取り組みで、多くの問題を抱えた大規模公的賃貸集合住宅団地を、住宅等のストックの活用を図りつつ、住民が守り育て、自立的に更新していけるような「まち」に再編することを目指す。また、適切な公・民の事業に適用できる技術を開発し、実践に活かすことを目的として、空間、制度、暮らしの多面的な視点から、団地そのものの再編を検討している。



◎ オーストラリア政府派遣短期日本語・日本文化研修プログラム

オーストラリアの日本語教師らが日本文化を体験

関西大学は、オーストラリア政府派遣短期日本語・日本文化研修プログラム(ELTF)の実施機関として採択されており、今年は1月2日から22日までの日程で59人の研修生を迎えた。

ELTFとは、オーストラリア政府が実施する外国語教師海外派遣プロジェクトの一つであり、オーストラリア各地で日本語教師として教育に携わっている人や日本語教師を目指している人が、日本で語学や文化を学ぶというプログラム。期間中、研修生は本学にて日本語の授業を受講し、併設校や近隣の小・中・高校を訪問して授業参観を行った。また、京都や神戸の寺社や文化施設を見学したり、大阪・道頓堀で食文化を体験したり、吹田市の成人式にも参加。更に、千里山キャンパスでは、狂言鑑賞の他、風呂敷の包み方やお弁当の作り方など、さまざまな日本文化体験を楽しんだ。



▲1月6日に開催された歓迎会での記念撮影

1. 風呂敷で瓶の包み方を学ぶ研修生たち
2. お弁当作りを体験。あと少しで完成!
3. 修了式で祝辞を述べるキャサリン・テイラー在大阪オーストラリア総領事



ELTF

◎ 大学受験を希望する被災地高校生を関大生がサポート

関西大学の研究センターSTEPが 岩手県立大槌高校への遠隔学習支援を開始



▲打ち合わせ中の「KUPIDO」メンバー



関西大学社会的信頼システム創生センター(STEP)は、2013年10月より、岩手県立大槌高校へのICTを活用した遠隔学習支援に関するプロジェクトを立ち上げ、支援活動を2014年1月から開始した。

関西大学と岩手県大槌町は2012年7月に人材育成・雇用創出による自律的復興支援に関する連携協定を締結しており、STEPが中心となって地元へのさまざまな支援を展開してきた。大槌町は、地域の若者の専門職への就業意欲が高まりを見せる中、震災以前より大槌町の大学進学率は相対的に低く、震災の影響もあり、勉強をする環境は必ずしも十分に整っていないという課題を抱えている。この状況をブレイクスルーするため、関大生が高校生の学習を支援するプロジェクトを稼働することとなった。

実際には、教員を目指す関大生を中心とする教育支援ボランティアサークル「KUPIDO」のメンバーが、社会学部に設置された多地点コミュニケーションシステムを利用し、インターネットを通じて、あたかも対面で話しているように自然な形で高校生の学習を支援している。講義は放課後の週1日、英語の指導から開始しており、初回から4回目までは高校生が本プロジェクトに永続的・積極的に関わり続けてもらうことを目的として、田尻悟郎教授(外国語学部)がキックオフ講義を行った。

◀1. ICTを活用した岩手県立大槌高校への遠隔授業の様子 2. 講義を行う田尻悟郎教授